

<資料>

2009年における流通科学大生の喫煙行動

Smoking Behavior of UMDS Students in 2009

中島 孝子*

Takako Nakashima

喫煙は多くの場合若年時に開始される習慣である。本論では、大学生の喫煙行動を調べることを目的とし、流通科学大生を対象にアンケート調査をおこなった。喫煙経験率は全体で31.6%であり、他の調査と比較して高い場合もあれば低い場合もあるが、大学生を対象とした比較可能な直近の調査に比べて高い。回答者の家族の中では父がたばこを吸う割合が高い。家族に喫煙者がいるかどうかと喫煙経験の有無とは関連している。最初の一本を吸った時期は小中学校の割合が高く比較的低位年齢である。

キーワード：大学生、喫煙行動、喫煙経験率

I. はじめに

喫煙により喫煙者および周囲の者の健康が損なわれることは多くの研究によって明らかにされてきた。たばこに含まれるニコチンの依存性によって喫煙者が望んでも禁煙は難しいとされている。では喫煙という「習慣」はいつから開始されるのだろうか。多くの喫煙は若年時に開始される。箕輪ら¹⁾は「喫煙は未成年のうちに始ま」り、「日本の場合でいうならば25歳を過ぎてから喫煙を経験して、常習的喫煙者になることはあまりない」と述べている。喫煙という習慣を始めるかどうかは主として20歳代前半までの若年者の問題なのである。

本論は流通科学大生を対象に実施されたアンケート調査の結果である。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の1本を吸った時期および現在の喫煙状況を知るなど、大学生の喫煙行動を調べることである。

以下に調査および分析結果を要約する。アンケートの回答者の平均年齢は19.3歳、回答者の家族の中で、「父」がたばこを吸う割合は約5割で最も高かった。一方で「家族は誰も吸わない」と回答した者は4割弱である。喫煙経験者は全体で31.6%であり、これらの喫煙経験者が「最初の一本を吸った時期」は小学校および中学校が最も多かった。これまでに吸った本数の合計が100本を超えているという意味で、喫煙経験者の約7割近くが、現在または過去において習慣的に喫煙している、またはしていた。一方で、喫煙経験者の現在の喫煙量は、「吸ったことがある程度で

*流通科学大学サービス産業学部、〒651-2188 神戸市西区学園西町3-1

習慣ではない」という回答が最も多く、次に「1日11～20本」および「1日1～10本」の喫煙量の者が多い。喫煙未経験者および喫煙経験はあるが「習慣ではない」者がたばこを吸わない理由としては、「健康のため」「たばこが嫌い」の順に割合が高かった。喫煙が現在習慣となっていると考えられる者は6割以上が5年後も喫煙していると考えている一方、喫煙が「習慣ではない」者と喫煙未経験者については、ほとんどが将来も喫煙していないと予想している。喫煙と健康に関する知識についてテスト形式の質問(6点満点)をしたところ、回答者全体の平均は3.7点であった。日常的に喫煙しない者に比較して、日常的な喫煙者のほうが平均点は低かった。

いくつかの項目を取り出して分析および考察をおこなった結果は以下のとおりである：(1) 喫煙経験の有無と家族に喫煙者がいるかどうかは統計的に有意に関連していた。(2) 喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の1本を吸った時期に統計的に関連があるとはいえない。(3) 喫煙と健康に関する知識について、日常的な喫煙者とそうでない者を比較すると、日常的でない喫煙者のほうが、平均得点が高い。一方、マークした病気の数を比較すると、平均の個数は両者でほとんど変わらない。(4) 喫煙量が多いほど禁煙希望が低いのではないかと予測したが、予測に反して、喫煙量と禁煙希望の間には統計的に関連があるとはいえなかった。(5) 現在の喫煙量が多い者ほど、これまでの喫煙本数の合計が100本を超えている者が多い。(6) 喫煙経験率を他の調査結果と比較すると、男女とも本調査のほうが高い場合もあれば低い場合もあった。

以下では、2節でアンケート結果の概略を述べ、3節で結果の分析および考察を行い、4節でまとめを述べる。

II. アンケート結果

アンケートは、大学1、2年生を主な対象とする講義²⁾の受講者に対して、講義の初日(2009年4月)に匿名でおこなった。質問は全部で11問あり、一部、喫煙経験ありの者と喫煙経験なしの者との質問が異なる。アンケートの回答用紙を返却した人数は157人、うち136人分を有効回答としてデータの集計対象とした³⁾。

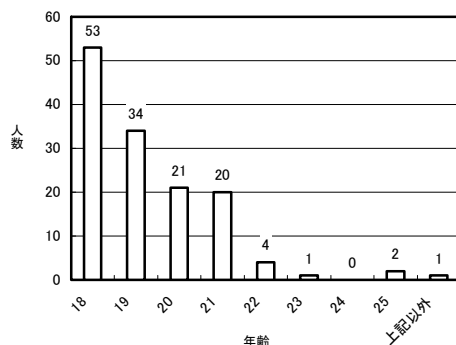


図1 回答者の年齢分布

有効データ数 136 のうち、男性が 108 人、女性が 28 人である。回答者の平均年齢は 19.3 歳である。図 1 は回答者の年齢分布を示している。18 歳、19 歳の順に人数が多い。

表 1 たばこを吸う家族

	父	兄	母	祖父	姉	祖母	弟	妹	その他	誰も吸わない
人数	66	18	14	13	7	6	6	2	7	50
割合 (%)	48.5	13.2	10.3	9.6	5.1	4.4	4.4	1.5	5.1	36.8

家族の喫煙状況について複数回答で質問した。家族の中では「父」が吸うと答えた者が最も多く、約 5 割を占める。次に、兄、母の順となる。家族が誰も吸わないと回答した者は全体の 36.8% である。

喫煙経験ありの者（以下、喫煙経験者）は全体の 31.6% である。男女の内訳は表 2 のとおりである。なお、喫煙経験者とは、アンケート調査日までに 1 回でもたばこを吸ったことがある者である。

表 2 喫煙経験の有無

	人数			割合 (%)		
	全体	男性	女性	全体	男性	女性
喫煙経験あり	43	38	5	31.6	35.2	17.9
喫煙経験なし	93	70	23	68.4	64.8	82.1
合計	136	108	28	100.0	100.0	100.0

喫煙経験者 43 名に対して、「最初の 1 本をいつ吸ったか」について質問した。図 2 を見ると、小学校や中学校など比較的 low 年齢の時期に最初の 1 本を吸っている者が多い。なお、中尾ら⁴⁾の調査では「初めてタバコを口にした年齢」は最低 12 歳と本調査よりも高い。一方、習慣的に喫煙

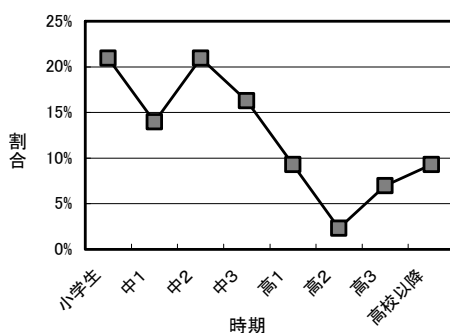


図 2 最初の 1 本を吸った時期

を開始した年齢は最低年齢が13歳で、平均的には男子17.8歳、女子19.2歳と報告されている。つまり、最初の本を吸った時期と、喫煙が習慣化する時期が異なることになる。本調査でもそのようなケースがあるだろうと推測される。

喫煙経験者に対して、これまで吸った本数をあわせると100本を超えるかどうかをたずねた。この質問は喫煙が習慣となっているかどうかの目安の一つとなる。喫煙経験者の7割近くが「100本を超える」と答えた。

なお、Emery et al.⁵⁾は10～22歳の若年者を対象に喫煙に関する調査を行い、喫煙経験の有無に加えて、これまでに100本を吸ったかどうかを基準に被調査者を4つに分類した。また、厚生労働省による調査⁶⁾でも、調査時点から過去1ヶ月における喫煙状況にこれまでに100本吸ったかどうかを加えて喫煙者の習慣性を定義している。

表3 これまで吸った本数の合計（喫煙経験者）

	100本を超える	100本を超えない	合計
人数	29	14	43
割合 (%)	67.4	32.6	100.0

同時に喫煙経験者に対して現在の喫煙量を尋ねた（表4）。最も多いのが「吸ったことがある程度で習慣ではない」という回答であった。次に喫煙量が「1日11～20本」、および「1日1～10本」の回答が多かった。毎日吸っている者は平均的に1日に10本程度消費していると考えてよい。

喫煙経験なしの者（以下、喫煙未経験者）と表4における喫煙量のカテゴリー7に属する者（合計107人）に対して、たばこを吸わない理由を複数回答で尋ねた。結果は表5のとおりである。最も多いのが「健康のため」、次に多いのが「たばこが嫌い」という回答であった。

表4 現在の喫煙量（喫煙経験者）

	喫煙量	人数	割合 (%)
1	1日21本以上	2	4.7
2	1日11～20本	13	30.2
3	1日1～10本	10	23.3
4	週に数本程度	1	2.3
5	月に数本程度	0	0.0
6	毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	3	7.0
7	吸ったことがある程度で習慣ではない	14	32.6
	合計	43	100.0

表 5 喫煙をしない理由

喫煙をしない理由	人数	割合 (%)
健康のため	86	80.4
たばこが嫌い	68	63.6
たばこの値段が高い、お金がもったいない	51	47.7
人の迷惑を考えて	29	27.1
機会がなかったから	5	4.7
その他	13	12.1

最後に回答者全員に対して2つの質問をした。1つは、「5年後にたばこを吸っているかどうか」、2つめは喫煙と健康に関する知識についての質問である。

表 6 より、表 4 における喫煙量のカテゴリ 1~6 に属する者は、65.5%が5年後もたばこを吸っていると予想しているのに対し、表 4 における喫煙量のカテゴリ 7 および喫煙未経験者は、ほとんど (95.3%) が5年後もたばこを吸っていないだろうと予想している。

表 6 5年後の予想

	喫煙量のカテゴリ 1~6 に 属する者 (人)	喫煙量のカテゴリ 7 に 属する者および喫煙未経験者 (人)
5年後にたばこを吸っている	19 (65.5%)	5 (4.7%)
5年後にたばこを吸っていない	10 (34.5%)	102 (95.3%)
合計	29 (100.0%)	107 (100.0%)

喫煙と健康に関する知識として、脳卒中、肺がん、食道がん、胃がん、心筋梗塞、膀胱がんの6種類の疾病を挙げ、その中で喫煙者の死亡確率が非喫煙者の10倍以上であるものを選ばせた。6つの疾病のうち死亡確率に10倍の差があるのは肺がんと食道がんである⁷⁾。正しい選択肢を選べば1点を与え、正しくない選択肢を選ばなかった場合も1点を与えて、最高得点を6点とした。全体で平均は3.7点であった。得点分布は4点をピークとする比較的左右対称な分布となっている(表7)。

表 7 喫煙と健康に関する知識の得点分布

得点	1	2	3	4	5	6	合計
人数	0	25	32	42	28	9	136
割合 (%)	0	18.4	23.5	30.9	20.6	6.6	100.0

Ⅲ. 分析および考察

1. 喫煙経験と家族の喫煙状況

家族の喫煙状況を喫煙経験の有無別にみると、家族のうち「誰も吸わない」と答えた者の割合は喫煙未経験者のほうが高い。つまり、家族の喫煙状況において、喫煙経験の有無と関連があると考えられるのは、家族が誰も吸わないかどうかである。そこで、家族の喫煙状況を誰かが吸うか吸わないかに着目して、表1と表2から表8を作成した。喫煙経験者ほど家族が誰も吸わない割合が低いと予想される。独立性の仮説検定の結果、喫煙経験の有無と家族に喫煙者がいるかどうかは関連していると結論できる（有意水準0.05）。

表8 喫煙経験別のたばこを吸う家族

	喫煙経験あり(人)	喫煙経験なし(人)	喫煙経験あり(%)	喫煙経験なし(%)
家族の誰かが吸う	33	53	76.7	57.0
家族は誰も吸わない	10	40	23.3	43.0
合計	43	93	100.0	100.0

2. 喫煙経験者における最初の1本を吸った時期と現在の喫煙量

ここでは、喫煙経験を喫煙量に応じて2タイプに分ける。1つ目は、喫煙量のカテゴリー1～3に含まれ、1日に10本程度かそれ以上喫煙している喫煙経験者である。これを「日常的な喫煙者」と定義する⁸⁾。2つ目は、喫煙量のカテゴリー4～7に含まれ、現在はたまにしか喫煙をしない喫煙経験者である。これを「日常的でない喫煙者」と定義する。さらに、最初の1本を吸った時期を「小学校」「中学校」「高校」「高校以降」の4つに集約する。

以上にもとづいて、日常的な喫煙者および日常的でない喫煙者それぞれについて、初めての1本を吸った時期を集計した（表9）。2つのタイプの喫煙経験ありの者を比較すると、両者の間に明白な違いはなく、むしろ最初の1本を吸った喫煙時期のパターンはよく似ている。独立性の検定を行い、現在の喫煙量と最初の1本を吸った時期に関連があるとはいえないとの結論を得た（有意水準0.05）。

表9 最初の1本を吸った時期

	最初の1本を吸った時期 (%)				合計
	小学校	中学校	高校	高校以降	
日常的な喫煙者	20.0	52.0	20.0	8.0	100
日常的でない喫煙者	22.2	50.0	16.7	11.1	100

なお、若年者が高校卒業後に新たにたばこを吸いはじめるかどうかには注目を。そこで、最初の一冊を吸った時期として高校以降に着目すると、わずか3ポイントであるが、日常的でない喫煙者が最初の一冊を吸っている割合は日常的な喫煙者に比較して高いことが観察される。さらにいえば、日常的でない喫煙者は、小学校で最初の一冊を吸った割合が日常的な喫煙者に比較して高い。このことから、日常的でない喫煙者は日常的な喫煙者に比較して、早い時期に最初の一冊を吸ってその後日常的に吸うことをやめた者と、最近最初の1冊を吸った者が相対的に多いことになる。

3. 知識

日常的な喫煙者と日常的でない喫煙者について、喫煙と健康の知識に関する質問での得点分布を図示すると図3のようになる。日常的な喫煙者の得点分布は双峰であるのに対し、日常的でない喫煙者の得点分布は4点をピークとする左右対称な分布を示している。また両者の得点の平均点はそれぞれ3.3点と3.8点であり、日常的でない喫煙者のほうが高い。

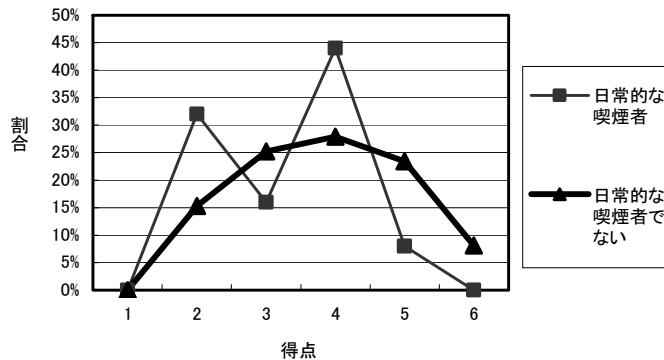


図3 知識に関する得点分布

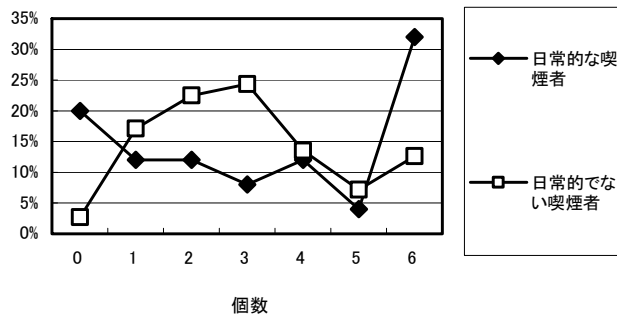


図4 マークした病気の数

一方、マークした病気の数を比較したところ、図4のような分布となった。マークした病気の数が多いほど、その回答者は喫煙するほど多くの病気になりやすいと考えていることになる。日常的な喫煙者では6個マークした者が最も多く、次に0個の者が多い。平均では3.2個である。一方、日常的な喫煙者でない者は、概ねマークした数が3個をピークとする分布となっており、平均でも3.0個である。両者がマークした病気の個数の平均値はほぼ近いといえるが、分布は異なっている。日常的な喫煙者は、喫煙が6つの病気いずれとも関連がないと考えているか、どの病気にも関連があると考えているかのどちらかという極端な分布を示している。

4. 喫煙経験者の喫煙量と禁煙希望の関連性

表4における喫煙量のカテゴリー1~6に属する者に対して、禁煙の希望を尋ねたところ、29人中15人が禁煙を希望し、14人は希望しないと答えた(表10)。全体としては禁煙を希望する者とならない者はほぼ同数である。しかし、詳しく見てみると、喫煙量のカテゴリー2(1日11~20本)では禁煙希望なしが禁煙希望ありを上回り、カテゴリー3(1日1~10本)では禁煙希望ありが禁煙希望なしを上回っている。したがって、喫煙量が多いほど禁煙を希望していないことが予想される。

表10のうち、日常的に喫煙をしていると考えられるカテゴリー1~3について、喫煙量と禁煙希望の関連について統計的検定をおこなった。予想に反して喫煙量と禁煙希望には関連があるとはいえない(有意水準0.05)。

表10 喫煙経験者の喫煙量と禁煙希望

喫煙量	禁煙希望		同 割合	
	あり(人)	なし(人)	あり(%)	なし(%)
1 1日21本以上	1	1	6.7	7.1
2 1日11~20本	5	8	33.3	57.1
3 1日1~10本	7	3	46.7	21.4
4 週に数本程度	1	0	6.7	0.0
5 月に数本程度	0	0	0.0	0.0
6 毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	1	2	6.7	14.3
合計	15	14	100.0	100.0

5. 喫煙経験者：これまでの喫煙量が100本を超える者と超えない者の喫煙量

これまでの喫煙量が100本を超えているかどうかは、過去または現在における喫煙習慣の有無を判断する指標となる。

表 11 を見ると、これまでの喫煙量が 100 本を超える者については、1 日 11～20 本程度吸っている者（喫煙量のカテゴリー2）および 1 日 1～10 本程度吸っている者（カテゴリー3）が多く、合計で約 8 割である。これらの者と 1 日 21 本以上吸っている者（カテゴリー1）については、毎日喫煙していると考えられることから、現在においても喫煙が習慣となっていると推測される。しかし、これまでの喫煙量が 100 本を超えていながら「毎日必ずではなく、気が向いたときだけ」と答えた者（カテゴリー6）と「吸ったことがある程度で習慣ではない」と答えた者（カテゴリー7）については、かつては喫煙が習慣となっていたが、現在は喫煙をやめたと解釈することができる⁹⁾。

表 11 これまでの喫煙量が 100 本を超える人と超えない人の、現在の喫煙量

喫煙量	これまでの喫煙量が 100 本を超える		これまでの喫煙量が 100 本を超えない	
	人数	割合 (%)	人数	割合 (%)
1 1 日 21 本以上	1	3.4	1	7.1
2 1 日 11 本～20 本	13	44.8	0	0.0
3 1 日 1～10 本	10	34.5	0	0.0
4 週に数本程度	1	3.4	0	0.0
5 月に数本程度	0	0.0	0	0.0
6 毎日必ずではなく、気が向いたときだけ	1	3.4	2	14.3
7 吸ったことがある程度で習慣ではない	3	10.3	11	78.6
合計	29	100.0	14	100.0

6. 喫煙経験率の比較

本調査における喫煙経験率は男性 35.2%、女性 17.9%である。この数値は同年代の若年者と比較して高いのだろうか、低いのだろうか。

尾崎¹⁰⁾が指摘しているように、近年、中高生の喫煙経験率は低下傾向にある。未成年者の喫煙にかんする全国調査¹¹⁾によれば、2000 年における高校 3 年生の喫煙経験率は男性 55.7%、女性 36.7%であるのに対し、2004 年においては男性が 42.0%、女性が 27.0%で、4 年間に男女とも低下している。

また、中尾ら¹²⁾の大学生を対象にした調査では、全く喫煙したことがないと答えた者の割合は男性 63.8%、女性 83.6%であった。これらのデータを使って計算すると喫煙経験率は男性 36.2%、女性 16.4%である。同様に、同じ大学の学生を対象とする最近の調査¹³⁾では、喫煙経験率は男性 31.9%、女性 6.3%である。

若年者の喫煙経験率は低下傾向にあるので、できる限り新しいデータと比較するのが望ましい。本調査における喫煙経験率は、厚生労働省によって調査された 2004 年度における高校 3 年生の喫煙経験率よりも低いが、中尾ら¹⁴⁾が大学生を対象として行った喫煙経験率よりも高い。中尾ら¹⁵⁾の結果と比較すると特に女性の喫煙率に大きな差があることは明らかである(表 12)。

なお、厚生労働省の調査は 2008 年度にも行われている。調査結果の公開が待たれる。

表 12 喫煙経験率の比較

調査の種類	データの属性	男性	女性
本調査(2009年)	大学生(平均年齢 19.3 歳)	35.2%	17.9%
厚生労働省(2000年度)	高校3年生	55.7%	36.7%
厚生労働省(2004年度)	高校3年生	42.0%	27.0%
中尾ら(2002)	大学生(平均年齢 20.2 歳)	36.2%	16.4%
中尾ら(2007)	大学生(平均年齢 19.2 歳)	31.9%	6.3%

IV. おわりに

本論では流通科学大生を対象に実施したアンケート調査の結果を述べている。調査の目的は、喫煙経験の有無、最初の 1 本を吸った時期および現在の喫煙状況など、大学生の喫煙行動を調べることである。

結果は、以下のとおりである：(1) 喫煙経験率は全体で 31.6%であった。この割合は、他の調査と比較して高い場合もあれば低い場合もあるが、大学生を対象とした比較可能な直近の調査に比べて高い。(2) 回答者の家族の中では父がたばこを吸う割合が高く、家族に喫煙者がいるかどうかと喫煙経験の有無とは統計的に有意に関連している。家族に喫煙者がいると未成年のうちに喫煙を経験する可能性が高いといえるだろう。(3) 最初の 1 本を吸った時期は小中学校の割合が高く比較的若年齢である。(4) 喫煙経験者の現在の喫煙量と、最初の 1 本を吸った時期に関連があるとはいえない。(5) 喫煙と健康に関する知識に関連して、日常的な喫煙者とそうでない者を比較すると、マークした病気の数の平均は両者でほとんど変わらないが、その分布は異なる。日常的な喫煙者はマークした病気の数が 0 かまたは全部である、という極端な分布を示した。(6) 統計的には現在の喫煙量と禁煙希望の間には関連があるとはいえなかった。(7) 現在の喫煙量が多い者ほど、これまでの喫煙本数の合計が 100 本を超えている者が多い。

なお、本調査における結果を見る際の注意点は、講義名(「健康の経済学」)に含まれる「健康」というキーワードによって、比較的「健康」に関心があり、喫煙を嫌っている者が多く受講していた可能性があると考えられる点である。もしこの可能性が現実のものならば、流通科学大生全体の喫煙経験率は、本調査の結果よりも高いものとなるだろう。

また、未成年者の喫煙は法律（未成年者喫煙禁止法）によって禁止されているが、本調査の回答者のほとんどが18、9歳であることから、現在喫煙している者の中にも未成年者が含まれることになる。さらに喫煙経験者の多くが未成年時に最初の一本を口にしている。実際、日本の未成年者を対象とする複数の調査結果はいずれも未成年者に喫煙経験や喫煙習慣があることを報告しており、未成年者喫煙禁止法は実効性を伴っているとはいえない¹⁶⁾。

法律による規制にもかかわらず、喫煙という習慣を始めるかどうかは主として20歳代前半までの若年者の問題である。このことを考慮すると、中尾ら¹⁷⁾や中尾ら¹⁸⁾など多くの文献において指摘されているように、大学という教育機関において習慣的な喫煙者を減少させるためには、大学入学以降の喫煙開始をくい止めること、および禁煙希望者への情報提供などの禁煙支援をどのように行うかを考えなければならないだろう。

したがって今後の課題としては(1)「最初の1本を吸った時期」だけでなく「喫煙が習慣化した時期」およびそのきっかけを調査することによって、若年者の喫煙が習慣化する要因を探ることが挙げられる。また喫煙という習慣が若年時に開始することを考えれば、大学における習慣的な喫煙者の減少をめざすことは人口全体の喫煙者数を減らすことにもつながる。その意味で、(2)すでに喫煙が習慣化している者にとって効果的な禁煙対策の効果を調べること、(3)大学入学以降において喫煙を始めないための対策を探ることが必要である。

引用文献、注

- 1) 箕輪真澄・尾崎米厚：「若年における喫煙開始がもたらす悪影響」、『保健医療科学』54, No. 4 (2005), 262-277.
- 2) 科目名は「教養特講（健康の経済学）」、履修者数は252人である。ただしこの人数は講義開始後、数週間を経たあとに確定した人数である。調査を行った当日は講義初日であったため、調査日における受講者数は若干異なると考えられる。
- 3) 喫煙経験者であるのに、喫煙経験のない者を対象とする質問に回答があるなどのデータを無効とした。
- 4) 中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・賀来俊・門司和彦：「大学生の喫煙行動と喫煙問題」、『長崎大学医学部保健学科紀要』15, No. 1 (2002), 53-59.
- 5) Emery, S., M.M. White and J.P. Pierce: "Does cigarette price influence adolescent experimentation", *Journal of Health Economics*, 20 (2001), 216-270.
- 6) 厚生労働省：『喫煙の状況（平成18年度国民健康・栄養調査）』（厚生労働省「たばこ健康に関する情報ページ」より（URL: <http://www.mhlw.go.jp/topics/tobacco/toukei/kituen03.html>, 2009年11月2日取得））。
- 7) 井伊雅子・大日康史：『医療サービス需要の経済分析』（日本経済新聞社, 2002）。
- 8) なお、総務庁の平成13（2001）年1月における報告書は、一日に数本以上喫煙している者を「たばこ常用者」と定義している（総務庁青少年対策部：『青少年とたばこ等に関する調査研究報告書 平成13年1月』（「厚生労働省のTOBACCO or HEALTH 最新たばこ情報」より（URL: <http://www.health-net.or.jp/tobacco/more/mr280300.pdf>, 2009年11月8日取得）））。

- 9) なお、これまでの喫煙量が100本を超えないが1日の喫煙量が21本以上と答えた者(1名)は、習慣的に吸い始めて4,5日であることになるが、この者については、現在の喫煙量またはこれまでの喫煙量の合計に関する回答のどちらかが間違いであったという可能性もありうる。
- 10) 尾崎米厚:「青少年の喫煙行動, 関連要因, および対策」, 『保健医療科学』54, No. 4 (2005), 284-289.
- 11) 厚生労働省:『未成年者の喫煙および飲酒行動に関する全国調査2000および2004』(厚生労働省「最新たばこ情報」ホームページより (URL:<http://www.health-net.or.jp/tobacco/product/pd110000.html>, 2009年8月15日取得))。
- 12) 中尾ら (2002)。
- 13) 中尾理恵子・田原靖昭・石井伸子・門司和彦:「未成年期に喫煙開始した若者の喫煙に関する認識とニコチン依存度 — 大学生の質問紙調査から—」, 『保健学研究』20, No.1 (2007), 59-65.
- 14) 中尾ら (2007)。
- 15) 中尾ら (2007)。
- 16) 中島孝子:「たばこと合理的意思決定について」, 『流通科学大学論集—経済・経営情報編』10, No. 3 (2002), 131-143.
- 17) 中尾ら (2002)。
- 18) 中尾ら (2007)。